

日常的な授業改善を支える省察手法のデザインの検討 A Study of the Design of a Reflective Method to Support Routine Classroom Improvement

藤森 裕紀
Yuki Fujimori

東京学芸大学大学院
Tokyo Gakugei University
r202003x@st.u-gakugei.ac.jp

概要

筆者自身の授業実践における省察記録やスケジュール、特徴的な出来事をもとに、教員の日常的な授業改善を支援する省察手法に求められるデザインについて探索的に検討した。実践の中で省察手法の役割が変化し得ることや省察の実践が中断される場合があること、再開する際は中断以前のねらいや手続きが継承される可能性があることが示唆された。実践の中断が起りうることを念頭に置いた、省察の再開を支える省察手法のデザインが求められる。

キーワード：省察的実践 (reflective practice), 授業日誌 (reflective journal), 授業改善 (classroom improvement)

1. はじめに

大学院修了から5年間、高校の非常勤講師を勤めてきた。生徒にとって少しでも良い授業にしたいと思い、教員3年目から授業日誌をつけ始めた。授業の振り返りの記録と筆者の周りで起きた出来事を手がかりに、授業改善を支える手法のデザインについて論じたい。

教育基本法第九条において、教員は「絶えず研究と修養に励み」、日々成長を続けることが求められている。中央教育審議会(2021)では、「教職生活を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け」る姿が教職員に求められている。これは、知識・技能を絶えず刷新し続ける必要性とともに掲げられた「学び続ける教員像」(中央教育審議会, 2012)に通じるものだといえる。教員が自らの教職実践を見つめ直す方略として、以降では省察を取り上げる。

シヨーン(2007)の提唱した省察的実践は教員の専門性に関する重要な概念としても用いられており(村井, 2015)、教員養成や授業研究などの分野において教員の省察を促す手法が数多く開発・活用されてきた。比較的实施が容易な手法として、相互作用場面を時系列に

沿って記述する「プロセスレコード」(山口・越智・山口, 2007)や、設定された観点にしたがって省察を行う「リフレクションシート」(高根・三澤・新保, 2014)が挙げられる。

省察手法の開発では、省察のための時間的制約が課題とされている(Wong, Mansor & Samsudin, 2015; 角田ら, 2021)。江崎・政岡・野村(2016)は日常的な授業づくりのための手法として、カード構造化法を用いた授業リフレクションを実践し、人的時間的制約が少ない省察の可能性を示した。このように、研究者が教育の現場へ積極的に介入し、教育実践の「質の向上」を促す手法とその可能性を検討した研究も存在する。

ここで、省察を継続することの意味を取り上げたい。教員に限らず、人を取り巻く環境や関係性は常に変化しており、それとともにその人も変わり続ける。土倉(2020)が指摘するように、実践における活動のねらいも実践の中で変化しうることから、省察のねらいや意味も実践の中で変わりゆくものだと考えられる。そこで、本研究では実践当時の出来事や時間的制約を分析の軸として、省察的実践のプロセスに着目することとした。

2. 目的

筆者の授業実践における省察記録を手がかりに、日常的な授業改善を支援する省察手法のデザインについて探索的に検討することを目的とする。本研究は、筆者自身の経験から得られた知見を教員文化へ還元し、授業実践へ活かすことを企図している。

3. 方法

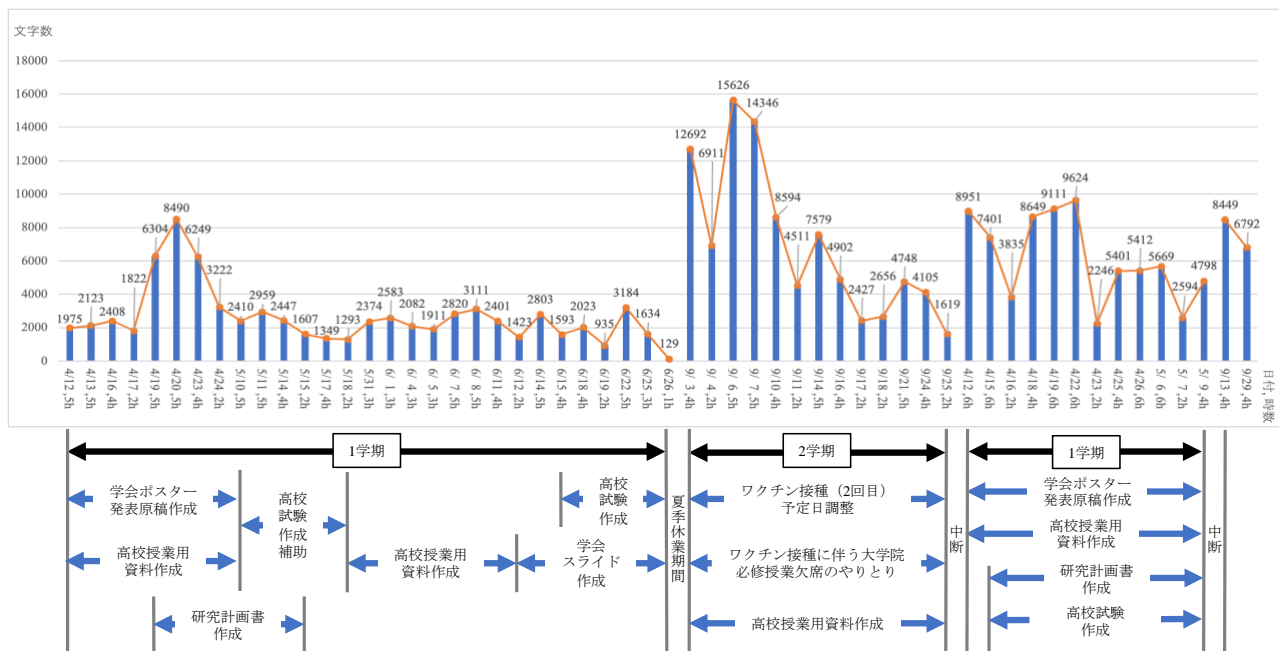


図1 2021～2022年の省察記録の文字数と特徴的な出来事

実践概要 筆者は2018～2022年度に、東京都の私立高校で非常勤講師として、『英語表現』『論理・表現（英語表現の改訂科目，2022年度の1年生のみ該当）』『コミュニケーション英語』『英語演習』の科目を担当した。全授業において、「言語や文化を手がかりに、周りに関わり，互いに支えあう授業を生徒とともに作る」ことをねらいとしていた。このねらいをもとに，授業改善を試みる実践研究の形式をとりながら授業を行った。

分析対象 筆者が自身の授業実践について作成した省察記録を分析対象とした。筆者は教育実習や教育インターンシップ以来，授業に関する省察的な記録を作成した経験がなかった。記録は新学期の開始日を始点に，2021年4月12日から9月25日，2022年4月12日から5月9日，9月13日から9月29日の期間に作成した。2022年9月13日と29日はその週の授業について一括で記録作成を行った。継続可能性を重視して，記録作成にはMicrosoft ExcelやiPhoneを臨機応変に活用した。記録作成は各授業後2日以内に時間割の順で行い，所要時間は1日あたり10分から3時間であった。

省察記録は授業日誌の形式をとった。授業日誌とは，教員が一日の実践を振り返り，覚えていることをできるだけ詳記した記録を指す。浅田(1998)は授業日誌の特徴として，授業における複雑で予測不可能な様々な出来事へ教員に注意を向けさせる機能を挙げている。日誌作成を通じ，授業実践に対する自身の認識枠組みへの気づきを得て，1年間の継続の中でその枠組みに変化が生じる可能性が指摘されている(藤森, 2021; 2022)。

授業は教員と生徒との共同の中で生み出される，一度として同じものが起こり得ない実践の場である(目黒, 2010)。授業の個性記述を通じて授業改善を目指す手段として，本研究では授業日誌を採用することとした。

分析方法 まず，省察記録の文字数をグラフにまとめた(図1)。次に，実践当時の特徴的な出来事をグラフに記載した。特徴的な出来事は，授業を主とする日常的な業務以外で2日以上継続した活動を基準に選定し，省察的実践の転換点を捉えるために導入した。そして，実践当時の筆者の平均的な1週間のスケジュールを表にまとめた(表1)。これは実践中の筆者を取り巻く状況を提示することで，実践当時の筆者の日々の活動を捉えるために導入した。休憩時間を青色，勤務時間を黄色，省察記録を作成した時間を緑色でそれぞれ示した。上述した3種類の資料を行き来しながら何度も読み返すことを通じて，実践当時の出来事の記述を作成した。

4. 結果

2021年1学期の省察的実践の記述 筆者は当時，高校で週4日16時間の授業を月，火，金，土曜日に，個別指導塾で週2日5時間の授業を火，金曜日に担当していた。4月12日から6月26日には，学会資料や研究計画書，高校の授業用資料や試験問題の作成があった。

この期間は1日あたり129～8490文字の記述量で記録を作成していた。1週目にあたる4月12日から17日の間，学級の雰囲気や一部生徒の行動などの大まかな授業の見取りが記述全体に見られた(図2)。4月13

表1 筆者のスケジュール(左:2021年,右:2022年)

	月	火	金	土		月	火	金	土
7:00	起床	起床	起床	起床	7:00	起床	起床	起床	起床
8:00	出勤		起床		8:00	出勤	出勤	出勤	出勤
9:00		出勤		出勤	9:00				
10:00	高校授業			高校授業	10:00	高校授業			高校授業
11:00		高校授業		高校授業	11:00		高校授業		高校授業
12:00			高校授業		12:00			高校授業	
13:00					13:00				
14:00				帰宅	14:00	食事			帰宅
15:00	移動			余暇 & 雑務	15:00	帰宅			余暇 & 雑務
16:00		帰宅	帰宅		16:00		帰宅	帰宅	
17:00	授業準備	移動	休憩	雑務	17:00	授業準備	移動	休憩	雑務
18:00			移動	食事	18:00			移動	食事
19:00		個別塾	個別塾	省察	19:00		個別塾	個別塾	省察
20:00				入浴	20:00	食事入浴			省察
21:00	帰宅				21:00				入浴
22:00	食事入浴				22:00	授業準備	帰宅	帰宅	授業準備
23:00		帰宅	帰宅	授業準備	23:00		帰宅	帰宅	授業準備
0:00	省察	食事入浴	食事入浴		0:00	省察	食事入浴	食事入浴	
1:00					1:00		省察	省察	
2:00	就寝	省察	省察		2:00	就寝	省察	省察	
3:00		就寝	就寝	就寝	3:00		入眠	入眠	入眠

注) 青色は休憩時間, 黄色は勤務時間, 緑色は省察記録を作成した時間を示す。

日の記録において, 日誌を書こうにも授業の詳細をまるで思い出せなかったことへの気づきへの言及が見られ(図3), それ以降は授業進行や生徒との対話内容などの具体的で詳細な記述が見られた(図4)。

以上のことから, 省察記録の作成を通じて, 実践における省察手法が果たす役割が変化していたことが推察された。省察記録は大まかな所感を書き留める忘備録から, 授業中の出来事への見方を精細にすることを支援する手法へと変化したものと捉えられる。

- 新学年初授業。かなり静か。
- 比較的フレンドリーな生徒が多い印象であったが, まだあまり心を開いてくれない様子の生徒も同程度いたように思える。

図2 2021年4月12日から17日の省察記録の例

序盤のことをあまり覚えていないことに途中から気がついた。振り返れば, 手元の板書計画を遂行することに集中してしまい, 本人達に全く気を配れていなかった。

図3 2021年4月13日の省察記録の一部抜粋

- 本来であれば授業後半にやれば良いかなと思って用意していた, 分詞を使った表現から扱うという順番の入れ替えを号令が始まってから行う方針に変更した。
- 直接話す中で, エマさんの境遇について自分たちなりに想像してみるという本文外の話から, 「それに似た話って, どこかにあったりしません?」と徐々に教科書本文へと近づいていった結果, 最終的に「あっ」と気付いた様子で本文中の話を引用して説明するにまで至っていた。

図4 2021年4月16日から6月26日の省察記録の例
2021年2学期の省察的実践の記述 9月3日から25日

までの期間には, 高校の授業用資料作成のほか, 2回目のワクチン接種の予定日調整やそれに伴う大学院の必修授業の欠席についてのやりとりがあった。この一件はワクチンの集団接種会場へ予約を行った結果, 予約日が大学院の必修授業の開講日と重なったことから始まった。保健所ワクチン調整室や必修授業の担当者, 大学院の指導教員との連絡が1週間以上継続し, 1回の返答につき30分から2時間, 総計約8時間を要した。

この期間は1日あたり1619~15626文字の記述量で記録を作成した。1学期と比較して授業展開についての記述が具体的になり, 筆者の授業中の即興的な判断や行動についての記述が見られた(図5)。一方で, この期間は記述量が減少傾向にあり, 9月25日を最後に記録作成は中断された。このように, 実践の中ではイレギュラーな出来事による時間的な負担に伴い, 省察が中断される場合がありうることを推察された。

ぼつりぼつり言葉を交わしながら相談をしたり, 考え込んだり悩み込んだりしている生徒の様子を見ると, 関わりたくなくなってしまおうという気持ちがかかなり大きく出ていたが, これまでに得られた1歩ぐっと堪えるという考えや感覚すらも出ることがなく, 安心してそのグループ内での協力を任せることができた。何よりも, どのグループも少し離れてから戻ってくると最も難しいと思う理由の選択やその理由の記述がかかなり進んでおり, 1歩ぐっとこらえて生徒を待つと言うことに私自身だいぶ慣れることができたのかもと感じた。

図5 2021年9月6日の省察記録の一部抜粋

2022年1学期の省察的実践の記述 筆者は高校で週4日18時間の授業を月, 火, 金, 土曜日に, 個別指導塾で週2日5時間の授業を火, 金曜日に担当した。4月12日から5月9日には, 学会資料や研究計画書, 高校の授業用資料や試験問題の作成があった。1学期中間試験の問題作成は2022年度が初であり, 「論理・表現」に関しては専任教諭の指導のもとで試験や資料作成に大きく関与した。担当授業時数は2時間増加し, 省察に費やすことができる時間は前年度より限られていた。

4月12日から5月9日までの期間は, 1日あたり2246~9624文字の記述量で記録を作成した。この期間の記述には, 授業展開や即興的な判断・行動, 次回以降の授業のための忘備録の他に, 同じ科目を扱う他の学級での授業との関連についての言及が散見された(図6)。この期間の記録作成は5月9日を最後に中断された。前年度2学期と同様に, 授業実践において省察手法が果たす役割が維持され続けていたが, 突発的な業務の増加や時間的制約の中で省察を中断することとなった。

前回から使い始めた教科書のレッスン1の大問Bから教科書に沿って続きを扱う予定であった。本日既に扱っていた他の学級での様子から予定している内容のおよそ終わりぐらいいまでは扱える見込みが立ったのでこれを目標に調整しつつ無理なく進めていく予定であった。

図6 2022年4月19日の省察記録の一部抜粋

2022年2学期の省察的実践の記述 9月13日から29日には、担当する全ての科目について授業の用具を黒板からプロジェクターとプリントへと一新し、『論理・表現』のみ連絡や提出物の管理をGoogle classroomへと移行した。毎授業のプロジェクターの持ち運びやプリントの作成・修正・印刷といった新たな業務によって、省察記録を作成するための時間がこれまで以上に制限されていた。そのため、省察記録を作成するための工夫として、それまでの授業での出来事や今後へ向けた改善点などを週末にまとめて記録することとした。

9月13日は8449文字、29日は6792文字の記述量で記録を作成した。この期間はこれまでも見られた記述の他、新しい教具の導入・運用についての言及が見られた(図7)。同年度1学期の記録でも、それまでに行われた省察のねらいや手続きが記録内容に見られていたことから、省察は中断以前のねらいや記録作成の手続きを継承した上で再開される可能性が推察された。

事前準備や確認などが非常に不足していたという点で、様々な課題や問題が見られる授業となってしまった。ただその一方で、今後何に気をつけるべきかと言うところに気づけたというところがまず大きい。そして教室にiPhoneとMacBookをもっていくことさえできればリアルタイムで訂正や修正、ともすれば問題の作成や追加といった+αの事柄もリアルタイムで行うことができるというところが今後の気づきやアイデアとして得られた大きな収穫であるように思う。

図7 2022年9月29日の省察記録の一部抜粋

5. 考察

ここまで、筆者の授業実践における省察記録や特徴的な出来事、スケジュールを手がかりに、省察のねらいや省察手法の果たす役割の変遷について記述してきた。この記述を通じて、以下の3点の示唆が得られた。

(1)省察記録の作成プロセスを通じて、授業実践における省察手法が果たす役割は変化しうる。(2)イレギュラーな出来事やスケジュールの変化による時間的な負担に伴い、省察的実践を中断することになる場合がある。(3)省察的実践を再開する場合、中断する以前のねらい

や手続きを継承した上で再開されうる。

以上の3点を踏まえ、教員の日常的な授業改善を支援する省察手法のデザインについて考察する。教員を取り巻く状況は日々変化しており、省察を中断せざるを得ない事態は常に起こりうる。これを念頭に置いて中断された省察の再開を支援することが、継続的な授業改善につながると推察される。省察は、生徒のよりよい学びを支える授業づくりや、それを通じた教員の成長を目指す授業改善につながり得る。省察手法やその実践には、省察の中断と再開を繰り返しながらでも実施可能だと感じられる再開可能性(restartability)を踏まえたデザインが求められるといえよう。

文献

- [1] 浅田匡 (1998). 自分の授業を見直す：授業日誌法の活用 浅田匡・生田考至・藤岡完治 (編) 成長する教師 (pp.147-160) 金子書房
- [2] 中央教育審議会 (2012). 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申)
- [3] 中央教育審議会 (2021). 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して：全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現 (答申)
- [4] 藤森裕紀 (2021). 省察を通じて授業実践についての語りはどのように変化するか 日本教育心理学会総会発表論文集, 63, 258.
- [5] 藤森裕紀 (2022). 1年間の省察的実践を通じて授業の実践と省察はどのように変化したか 日本教育心理学会総会発表論文集, 64, 158.
- [6] 角田豊・中垣ますみ・西井薫・富永吉喜・飛田祥 (2021). 学校臨床力と教師の省察：プロセスレコードを用いた感性を磨く省察会のあり方 京都教育大学紀, 138, 255-271.
- [7] 目黒悟 (2010). 看護教育を拓く授業リフレクション：教える人の学びと成長 メヂカルフレンド社
- [8] 村井尚子 (2015). 教師教育における「省察」の意義の再検討：教師の専門性としての教育的タクトを身につけるために 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 5, 175-183.
- [9] Schön, D. A. (1984). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action*. Basic Books. (シヨーン, D. A. 柳沢昌一・三輪建二 (監訳) (2007). 省察的実践とは何か：プロフェッショナルの行為と思考 鳳書房)
- [10] 高根信吾・三澤宏次・新保淳 (2014). 「学び続ける教員像」確立のために求められるリフレクションに関する研究 (1) 常葉大学保育学部紀要, 1, 95-107.
- [11] 土倉英志 (2020). 変わりゆく実践研究と実践研究における研究者の役割：サイエンスカフェの実践研究のエスノグラフィ 認知科学 27(2), 192-205.
- [12] Wong, Y., Mansor, R., & Samsudin, S. (2015). The challenge of producing progressive teachers in Malaysia: A case study of reflective writings among UPSI student teachers. *GEOGRAFIA OnlineTM Malaysian Journal of Society and Space*, 11, 21-32.
- [13] 山口美和・越智康詞・山口恒夫 (2007). 教師教育におけるリフレクション方法の検討：「プロセスレコード」による事例の振り返りを通して 信州大学教育学部紀要, 119, 79-90.